

被災者の声

20代男性

(下高根沢)

東日本大震災の日、家の工事があり、私は珍しく仕事の手伝いをしていました。よく手伝いをしていた子どものころを思い出して、懐かしく思いつながら。

しかし、突如として大きな揺れが襲いました。父の「逃げろ！」という大声で一心に外へ飛び出したことは今も鮮明に覚えています。そして逃げたはずの私の目に飛び込んできたのは、無残にも崩壊した家屋の外壁など想像を遥かにしのぐ光景でした。そんな恐ろしい光景に立ちつくす中、最後に弟が帰宅し、幸いにも家族全員が無事顔をそろえることができました。

しかし、ライフラインが止まり、家の中が足の踏み場もないほど荒れていたため、話し合う間もなく家族で避難所へ向かいました。避難所には

見慣れた顔もありましたが、私はその不安な表情を目にして声をかけることもできませんでした。非常事態に役場の方々も対応に追われ慌ただしく動く中、両親は冷静に自宅や倉庫から発電機や暖房器具などの装備を整え避難所へ運び込んだり、役場の方々といろいろなり取りをしていました。私はそんな両親を手伝うことしかできませんでした。夜が更けてやっと一息ついたとき、両親と会話を交わしながら改めて両親を心から尊敬しました。

いささか不謹慎かもしれませんが、その震災のおかげで普段は反面教師である両親の違う一面を見ることができました。自分自身としては親から自立しているつもりでしたが、容易に親は超えられないと気づかされました。

40代男性

(稲毛田)

東日本大震災―それは、家族にとって、私にとって、とても大きな衝撃でした。

家・納屋・石塀・墓など、すべての建物が何らかの被害を受け、建て替えや修理を余儀なくされました。もちろん、まだすべてが終わった訳ではありませんが、この1年4カ月の間にあった出来事は、とても一言では言い表わすことはできません。

家族が別れての避難生活。ただ1つの救いは、みんなの心が1つだったことです。早くまた家族と一緒に住めるように…そう願って家を新築しました。



▲高校生ボランティアの皆さん (旧下高根沢小学校体育館)

また普通の生活に戻りつつあります。国や町からの義援金もとてもありがたかったです。私たちは、さまざまなつながりの中で生かされているのだと、本当に感謝の気持ちでいっぱいになりました。これからも「心の絆」を大切に生きていこうと思います。

50代女性

(下高根沢)

「ゴーツ!!」異様な地鳴りとともに建物が大きく揺れまわりました。事務所の机の下にもぐったまま、とても長く長い時間を感じた東日本大震災。

高台にある自宅の西側による壁がありました。崩れ落ち、傾いた家の中は足の踏み場もないような悲惨な状態となりました。水道・電気などのライフラインは止まったまま…。

そして震災から3日目、やっと娘の携帯とつながりました。そして携帯の向こうから聞こえてきた娘の話に、私は言葉を失いました。当時、自衛官として宮城県多賀城市の駐屯地に勤務していた娘は、4月1日に御殿場に異動が決まり、引越しの準備をしてい



▲おにぎりといちごの配達

皆さんの温かい気持ち、行動

震災では、町民の皆さんからはもちろん、全国各地の人から義援金や各種の物資をお預かりしました。また、がれき撤去や物資の整理、町民会館などの避難所で炊き出しなど、ボランティア活動を行っていただきました。当然、ご自身も被災されている人がいると思いますが、多くの人から温かいお気持ちをいただきました。ありがとうございます。

町に寄せられた義援金8,363,750円は、町義援金配分委員会で決定した額を全壊、大規模半壊、半壊の世帯に配分しました。

ボランティア活動では、皆さまからいただいた支援物資の仕分けと梱包作業に高校生グループが、春休みを利用して参加してくれました。またがれきの撤去作業では、社会福祉協議会を中心に町民の人が参加してくれました。

そして、最後の避難所となった町民会館では、避難している人にトマトなどの新鮮な野菜やうどん、味噌汁やカレーなど温かい料理を提供していただきました。

―あとがき―

多くの方がこの震災で被災し、心に大きな傷を負いました。この震災特集を企画するきっかけになった1通の手紙―そこには、不安と寒さに震えていた震災当日の出来事がありありと書かれ、そして現在(いま)感謝の気持ちを何かに伝えようとするけなげさが伝わってきました。

被災された人はもちろん、物質的な被害がなくても東日本を襲った津波や原発事故のさまざまな現実から、すべての町民の皆さんが心を痛めていると思います。右のページに掲載した「被災者の声」は、被災された人に原稿執筆をお願いして書いていただいたものです。執筆を快く引き受けてくださったことに感謝しています。内容を読んで、家族や地域との絆、命の尊さを感じることができました。このように、すべての被災された人の気持ち、現在(いま)は少しでも前向きに、少しでも癒されていることを願います。

被災者の皆さんに少しでも元気になっていただくこと、町でさまざまな支援策を提案しました。そして、自宅が全壊

大規模半壊、半壊の判定を受けた世帯を対象に平成23年と24年の固定資産税の減免(減額)を行いました。さらに国民健康保険税も減免しています。現在(いま)でも、多くの方が被災地の支援活動を行っています。私も7月の中旬に宮城県女川町にイベントの手伝いに町職員と参加しました。そこでは、我々以外にも全国各地から多くの若者が集まり、会場整理やイベント運営のボランティア活動を行っています。また各種メディアでも各地の支援活動を取り上げています。「お互いさま」「おかげさま」の気持ちが伝わってきました。

「備えあれば憂いなし」：ありきたりな言葉ですが、今、この言葉の意義を見つめ直し「天災は忘れたころにやってくる」ことを肝に命じて、今後の備えをしておくべきです。国、県や町などの自治体、自治会などの地域の集合体、家庭や家族、これらの役割分担がもしものときにどれだけの力を発揮できるかがカギとなります。

次回は、今後の町の防災計画について説明したいと思います。(山本)



▲支援物資の仕分け (平成23年4月 旧下高根沢小学校体育館)



▲女川町支援 (平成23年4月2日)



▲炊き出し風景 (平成23年3月 町民会館)